

## 営業スキル向上勉強会(#9)

2016年11月29日

書籍タイトル :本を読む人だけが手にするもの

今回この本を読んだ目的、きっかけ：

現在、営業スキル向上勉強会で様々な書籍を読んでいるが、1冊1冊を読むことで得られる知識を増やす目的とより自分のためになる読み方を学ぶため。

概要：

まず最初にこの著書は何故本を読むといいのかについて考える本である。

親や先生はみな、子どもに「本を読みなさい」と言う。しかし、反対に「どうして読まなければいけないの？読むといいことあるの？」と正面から問い返されたら理路整然と答えられる大人はなかなかいない。

そもそも、子供の頃に親や先生にそう言われて、疑問に思わなかつただろうか。(私[読者]は本は語彙や見識を増やすためのものや娯楽としか捉えていなかったので疑問に思わなかつた。)子供を持つ親の立場になった人は、子どもからそう問いかけられて、言葉に詰まったこともあるはず。そうした体験を持つ読者たちに本を読むことの本質を問いかけている。そして、まとめとなってしまうがこの著書の著者が結局一番伝えたいことは、著書の中にも記されているが「読書をする人は、著者(この場合、この著書も含め、全ての書籍)の脳のかげらを自分の脳につなげることで脳を拡張し、世界観を広げられる人」だということである。何より、その力はイマジネーションを豊かに育むことにつながる。

イマジネーション豊かな人は、それが最先端のIT系の会社でも、テレビや映画のようなメディア業界でも、みな、読書を愛する人だ。

参考にしたい点、気になる点

### 1. 『「本を読む習慣がある人」と「そうでない人」に二分される階層社会』

これから先の日本では、身分や権力やお金による“階層社会”ではなく、「本を読む習慣のある人」と「本を読む習慣のない人」に二分される“階層社会”がやってくると著者は見ている。(私[読者]は極論であると同時にあながち間違っていないと感じた。)

その顕著な例として、あるテレビ番組で、読書について取り上げているものがあった。まず、その冒頭で文化庁が発表した「読書」に関する調査結果を挙げている。1か月に1冊も本を読まないという人が47.5%に達し、日本人の2人に1人は本を読まなくなったのである。

番組は、帝京大学の学生に取材し、次のような回答を得た。

「インターネットで調べた方が、本を読むよりもすぐに調べられるので、読書に回す時間はほぼない」

「スマートフォンも実際に情報がたくさん詰まっているものなので、そちらを見ている時間にとられてしまう」

これが現代の若者の実態だろう。

次に本を読まないことの影響を調べるために大学教授と実験を行った。

それは、学生がレポートを書くにあたって、本を読む人と読まない人の間にどのような違いがあるかについて比較する実験である。

長くなってしまっているので要約すると、ある題目に関して、含めるべきだと思った事実、議論などを箇条書きにし、論旨と意見を 1500 字でまとめるというものだ。なお、参考資料として、図書館内の書籍やインターネットは自由に使用してかまわないという条件付きだ。この実験に対して、参加者である 6 人の学生は全員がインターネットを使った。しかし、6 人のうち、5 人がそのままネット記事のみでレポートを完成させたのに対し、残る 1 人はネットで参考になりそうな書籍の名前をメモし、図書館に向かった。

最終的に出来上がったものは、5 人の方は、テーマが多岐にわたっているがまとめられていない。しかし、書籍を使って完成させた 1 人はテーマを絞り、自ら仮説を立てながら資料に当たり、論理的な思考を行い、自分なりの論旨を展開させていた。

「読書」と「自分なりの意見」は相関関係にある。著者の経験からもそうだ。

著者はある時期まで、まったく本を読まなかった。それでも、大学卒業と同時に入社したリクルート時代は面白い企画を考えだし、実際に結果も出していた。しかし、世の中に対する意見や人生に対する仮説を持つことはできなかった。そしてようやくそういうものが出てきたのは 30 代を超えてから読書をはじめ、300 冊を超えたあたりからだった。そして、著者が改めて感じたのは、読書を通じて知識のインプットを蓄積していかないと自分の意見というものが出てこないという事実だ。

つまり、ネットだけの情報では底の浅い思考しかできない。深く論理的な思考をする上で、本は絶対に欠かせないものだ。

## 2. 『本を読むことは、「みかた」を増やすことだ』

本を読んで、他人の脳のかげらとつながる(興味のある人は p79 から参照)というのは、言い換えれば、「みかた」を増やすことだ。みかたには 2 つの意味がある。

1 つは「見方」を広げ、増やすこと。

本を読むことは、著者(この著書だけではない)が獲得した知恵を、読者の脳につなげる行為である。自分の脳を他者の「脳のかげら」とつなげることで、自分の脳が拡張される。世界を見るための視点や知恵を獲得することで、読者は世界の見方を広げ、

多面的かつ複眼的に思考できるようになる。自身の世界観(見方)を広げることで、玉石混交の情報に騙されにくくなり、ある決断をするための選択肢が増えることになる。何よりもリスクを分散することが出来るため、本を読めば読むほど自分の身を守ることにもつながる。

もう1つは「味方」を増やすことである。

たくさんの著者の脳のかげらを自分の脳につなげることで見方が拡張されると、様々な脳(人)との交流が可能となる。そうすることで、他者と世界観を共有することにつながる。そして、共通点がいくつも発見され、脳の中に共有のドメインを築けた相手が、結果的に自分の味方になってくれることにつながるのだ。それはやがて他者との間の共感や信頼に発展し、周囲から得られる「信任(信頼と共感を掛け算したものの)の総量(クレジット)を増やしてくれる。

本を読む人と読まない人との間には、大きな差が生まれ、しかもその差は指数関数的に広がっていく。

結果的に、クレジットが高まるとあらゆる夢が実現しやすくなる。自分を取り巻く他人や組織や世の中全体からの信頼や共感が厚くなるからだ。そうすれば、多くのチャンスが巡ってくるし、夢を実現させるためのサポートも得られるだろう。

### 3. 『これからの時代に欠かせないものは「情報編集力」』

今までの成長社会ではひたすらに「情報処理力」が求められたのに対して、これからの成熟社会には必須のスキルがだんだん「情報編集力」に移行してきている。

では、「情報処理力」や「情報編集力」とは何だろうか。

情報処理力とは、決められた世界観の中でゲームをするとき、いち早く正解を導き出す力のことだ。つまり、正解を早く正確に当てる力だ。旧来の日本の教育は、この情報処理力を鍛える取り組みが中心だった。

例えば、『走れメロス』を題材としたテストなどで、「帰り道のメロスの気持ちに近いものを、次の4つの中から一つ選びなさい」といった設問が与えられるのが、20世紀型の成長社会におけるテストの典型的なものだ。

これに対して、21世紀型の成熟社会で求められるのが情報編集力である。情報編集力とは、身に付けた知識や技術を組み合わせて“納得解”を導き出す力だ。ただあてるのではなく、納得できる解を自ら作り出すところがミソ。

正解は1つではなく、組み合わせ方は無限にある。そのなかで、自分なりに世界観を作り出せるかが求められる。情報処理力が「アタマの回転の速さ」だとすれば、情報編集力は「アタマの柔らかさ」といえる。

『走れメロス』を題材にしたテストを行うとしても、選択肢の中から正解を選ばせるのではなく、「メロスがもし間に合わなかったら、本当に王はメロスの親友を殺していたのだろうか、について論じなさい」といった具合に、自ら仮説を作らせ、ディベ

ートさせるような形になるだろう。

情報編集力を駆使し、イマジネーションを働かせる力が、子育てや教育問題といった身近なことを考えたり、ビジネスにおいて新商品や新サービスのアイデアを出したり、顧客からのクレームに対応したりするときにも欠かすことのできない力となる。成熟社会で、選択肢の幅を広げ人生を豊かに生きるには、柔軟でクリエイティブな発想をベースにした情報編集力が欠かせない。

## 感想

今回この本を読むことで今まで自分が行ってきた「読書」というものの意義をより深く知ることが出来た。

特に今回は参考にしたい点に選ばなかったが p.194 の「本は読むだけでは終わらせない」に関しては全くその通りだと思った。

ただ単に本を読んでインプットするだけで終わりでは内容もそれほど印象に残らない場合がほとんどだ。もし、読書の習慣を身に付ける目的で読んでいるとすれば、読書の習慣は身につかないかもしれない。何故ならただ読んで終わりでは内容に関してあまり考察せず、面白くないまま終わってしまい、飽きてしまう。

そこで、今回、私が行っているように、営業スキル向上勉強会を実施することによってたくさんの知識に触れ、それをインプットし、また、レポートという形でアウトプットすることで、自分の意見を作り上げる力に始まり、様々な力を養うことが出来る。

この本を読むことが出来て本当に良かったと思う。この先、本を読むことで得られるものが今までの何倍も大きくなるだろう。